

森 貞

(福井工業高等専門学校)

要旨

本稿の目的は、V1 が他動詞である日本語複合動詞(V1+V2)において、V2 が「尽くす」「直す」「返す」の場合、通常、V1 (他動詞) の受身形が容認されない理由を探るとともに、V1 受身形が容認される場合には、どのような認知的要因が関わっているかを解明することである。まず、V1 受身形は、それが《trajector 付与先の不一致》を引き起こすために、容認されないことを示し、《trajector 付与先の不一致》が解消された場合に限り、V1 受身形が容認されると予想する。そして、V2 が「尽くす」「直す」の場合は、【自動詞用法(解釈)の発動】が、V2 が「返す」の場合には、【文法特性に対する意識の希薄化】が、《trajector 付与先の不一致》を解消し、V1 受身形の容認を可能にする主張する。さらに、二重受け身(V1 と V2 の同時受動化)は、《trajector 付与先の不一致》を解消するための有効な手段として位置づけられることを主張する。

1. はじめに

一般に、V1 が他動詞である日本語複合動詞(V1+V2)において、V2 が「尽くす」「直す」「返す」の場合は、V1 受動形は容認されないとされている ((1)(2)参照のこと)。

- (1) 「～尽くす」 *調べられ尽くした。
「～直す」 *調べられ直す。

(影山 (1993: 166))

- (2) 筆者自身の言語感覚では、V2 が「返す」の場合、V1 受動形は、容認不可能である。

(森 (2022: 70) 一部加筆)

しかし、(3)(4)に示すように、容認可能とする研究もある。

- (3) a. 完成しかかったパズルは一度崩れ、正しい形へと 組み立てられ直す。

b. あらかじめふられているとも言える妻に、60 年かけてきっちりふられ直すため、恋をしている男。

(由本 (2005:278))

- (4) a. タレントの〇〇をフォローしたら、すぐにフォロー {し返され～され返し} た。

b. 定期預金を中途解約すると、利子が不利な金利で計算 {し直され～され直し} てしまう。

c. 破壊 {し尽くされ～され尽くし} た街

(山部 (2003: 111))

本稿では、V2 が「尽くす」「直す」「返す」の場合、本来、V1 の受動化は許されないが、V2 に対する解釈の仕方次第で V1 受動形が容認される場合があるとする立場をとる。

本稿の構成は以下のとおりである。2 節では、実相の確認を行う。3 節では、認知言語学的手法を用いて、①V1 の受動化が阻止される理由(阻止に関わる認知的要因) ②V1 の受動化が容認される場合の認知的要因 ③二重受け身(V1 と V2 の同時受動化)を促進する認知的要因 を明らかにする。4 節はまとめである。

2. 実相の確認

2.1. インターネット検索

V2 が「尽くす」「直す」「返す」の場合、インターネット検索(検索日 2023/04/12)による受動化の生起状況は以下のとおりである(なお、ドメインを[ac.jp]—日本国内の高等教育機関、学術研究機関などが登録可能—に

限定して検索を行った)。

表1：V2 = 「尽くす」のインターネット(ac.jp)における生起状況

V2 受け身	V1 受け身	二重受け身
280 件 (30.1%)	349 件 (37.6%)	300 件 (32.3%)

- (5) 現代の言語学や言語分析哲学によって自然言語における記号と意味との関係が解明され尽くしたわけではない。
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-18520029/>
- (6) 現代に目を転ずるとき、分枝論と終身性とは説明され尽くされないかのような複雑な利用形態が見られる。
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-23730002/>

表2：V2 = 「直す」のインターネット(ac.jp)における生起状況

V2 受け身	V1 受け身	二重受け身
243 件 (42.5%)	158 件 (27.6%)	171 件 (29.9%)

- (7) 日本のプレースタイルは(肉体的な欠点を補うために)「独自」かつ「特殊」な発展を遂げたものとして定義・解釈され直し、「先進国」との共通性ではなく差異がことさら強調されるようになる。
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-23700759/>
- (8) 球面全体を測定するために、球半分の測定が終わってから、球は別のジグに接着され直しされ、残りの球半分が測定された。
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-24656110/>

表3：V2 = 「返す」のインターネット(ac.jp)における生起状況

V2 受け身	V1 受け身	二重受け身
13 件 (54.2%)	7 件 (29.2%)	4 件 (16.6%)

- (9) 本書の表現に「ケアにあたるひとがケアを必要としている人に逆にときにより深くケアされ返す反転」(p.175)がある。
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-15K03952/>
- (10) 他者に向かう人類学は、他者の側からその視線の権力性を批判され返すようになった。
https://ocw.u-tokyo.ac.jp/lecture_files/11440/4/notes/ja/04nakajima02020501_final.pdf
- (11) 所有関係においては、所有する者はそれが所有するものに所有され返す。カフカがミレナを所有するなら、ミレナはカフカを所有する。
https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/134460/1/dkh00019_095.pdf
- (12) たまにアルパカを威嚇して、逆に威嚇され返される (写真4)。
http://www.anth.jinkan.kyoto-u.ac.jp/photoessay/201206_tsukuda.pdf
- (13) 3つ目は、フォローされ返されるのを期待してフォローをする「相互性」だ。
<https://www.komazawa-u.ac.jp/wp-content/uploads/2022/03>

2.2. 言語感覚調査

V2が「尽くす」「直す」「返す」の場合のV1受け身文に対する言語感覚調査(回答者:107人(18~19歳)、実施期間:2023/02/13~2023/2/17[Microsoft Forms利用])の結果は以下のとおりである。

- (14) [1] 君が選んだこの研究テーマは、調べられ尽くしているから、別の研究テーマにした方がよい。
 【[○33 (30.9%)], [△56 (52.3%)], [*18 (16.8%)]】
- [2] 地域防災計画は宮城県沖地震の被害想定を基に作られたが、合併後の状況を踏まえて作られ直したものである。
 【[○68 (63.5%)], [△20 (18.7%)], [*19 (17.8%)]】
- [3] ケアにあたるひとが、ケアを必要としているひとに、逆にときにより深くケアされ返す反転が《ホスピタブルな光景》には起きている。
 【[○19 (17.8%)], [△45 (42.0%)], [*43 (40.2%)]】

アンケート結果を見ると、「直す」「尽くす」「返す」の順番に容認可能性が下がっていることが分かる。

3. 認知言語学的考察

3.1. V1 受動化の阻止要因

V2 がアスペクト動詞の「始める」の場合、V1 受動化と V2 受動化の両方が可能である。但し、V1 が受動化される場合と V2 が受動化される場合では、「始める」の性質が異なる。

- (15) 柴谷 (1978)・久野 (1983)では「～始める」というアスペクト動詞を含む構文の深層構造には次のような 2 つのタイプがあることが主張されている。

(3) 太郎が [(太郎が) 本を読み] 始めた。

(4) [(太郎が本を読み) 始めた。

柴谷 (1978) によると、例文(3)の場合の「始める」は、「(本を読む) ことを始める」という意味の他動詞用法の「始める」であり、「始める」の主語は文主語の「太郎」である。それに対して例文(4)の「始める」は、「(太郎が本を読む) ことが始まる」という意味の自動詞用法の「始める」であり、その主語は、文主語の「太郎」ではなく、「太郎が本を読む」という文全体である。柴谷 (1978) はさらに、前者の「始める」がある人の動作を表現しているのに対して、後者の「始める」はある事象の起りを表現している、という考察をおこなっている。以下、動作の開始を表す他動詞用法の「始める」を「始める (A)」、事象の開始を表す自動詞用法の「始める」を「始める (B)」とする。ここで、動作の開始を表す「始める (A)」が受動化される場合には「始め(A)-られる」という形になり、事象の生起を表す「始める (B)」が受動化される場合には「られ-始める (B)」という形になるというわけである。

(西川 (1995: 40))

(15)の内容は、アスペクト表示 (図1) を援用し、図2～図5の意味構造図 (二重矢印=V1、縦棒=V2、tr=trajector (参加者の中で最も際立っている実体)) で図示することが出来る。

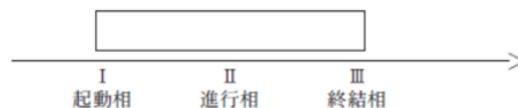


図1：アスペクト表示 (大里 (2012: 31))

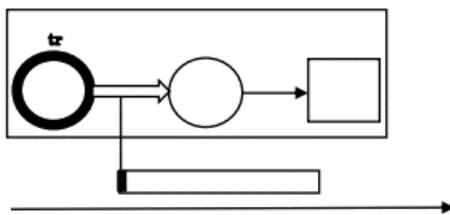


図2：「～し始める(A)」の意味構造図

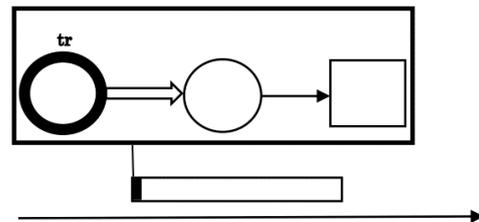


図3：「～し始める(B)」の意味構造図

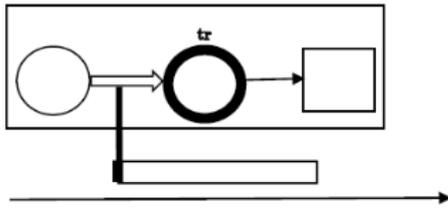


図4：「～し始められる」の意味構造図

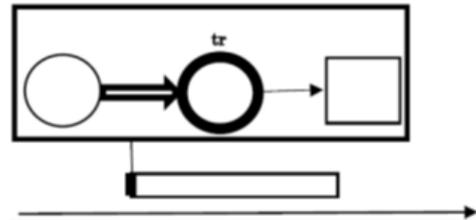


図5：「～され始める」の意味構造図

ここで注目すべき点は、意味構造図でV1とV2が連結している場合は、V2が受動化され(図4)、連結していない場合は、V1が受動化されるという点である(矢印・縦棒で太くなっている個所は受動化されていることを表す)。

同じアスペクト動詞でも、V2が「終わる」(他動詞)の場合は、V1の受動化は許されず、V2のみ受動化が許される。

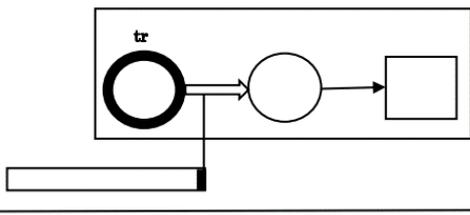


図6：「～し終わる」の意味構造図

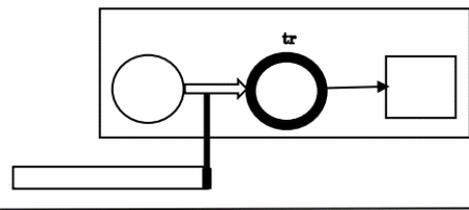


図7：「～し終わられる」の意味構造図

他方、V2が「終わる」(自動詞)の場合は、V2の受動化は許されず、V1のみ受動化が許される。

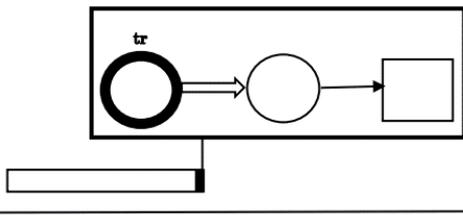


図8：「～し終わる」の意味構造図

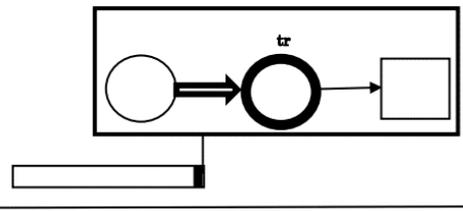


図9：「～され終わる」の意味構造図

以上の観察から、V2が他動詞である場合は、V1受動化は許されず、V2が自動詞あるいは意味論的に自動詞相当と見なされている場合は、V1受動化が許されることが分かる。では、その理由は何か？

動詞が他動詞の場合、能動形であれば、動作主が **trajector** となり、受動形であれば、被動作主が **trajector** となる。したがって、V1が能動形でV2が受動形の場合、《trajector 付与先の不一致》が起こりそうであるが、【V1+V2】のひとまとまりで一つの単語と見なされていれば(通常、そのように見なされる)、V1の能動形は意識されず、「trajectorの付与先が一致していない」という意識が生じることはない(したがって、容認可能となる)。他方、V1が受動形でV2が能動形の場合は、「trajectorの付与先が一致していない」ということが強く意識されるため、V1の受動化が阻止されると考えられる。

3.2. V1受動化の阻止を解消する認知的要因

3.2.1. V2=「尽くす」の場合

杉本(2009)では、『「一尽くす」は複数の事態において前項動詞で表される行為を一つ一つ成し遂げていき、100パーセント達成されていること(完遂)を表す』(p.93)とされている。この規定を勘案すると、V2=「尽くす」の場合の意味構造図は、図10のように図示することができる。長方形の中の長方形内において、V1の行為を受ける実体○が当該行為により全く別の実体□に移行(変化)していること(完遂)が表されており、V1を表す二重矢印に接続する縦棒(「尽くす」は、本来、他動詞であるので、二重矢印に接続する縦棒[=V2]で表されること

になる) にその長方形からの二重線を接続させることで縦棒は「一尽くす」を意味することになる。図 11 は、「～し尽くされる」の意味構造図である。

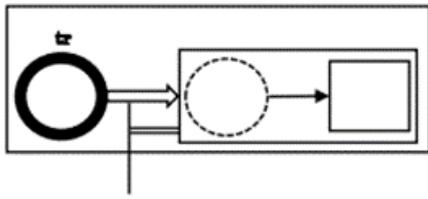


図 10 : 「～し尽くす」の意味構造図

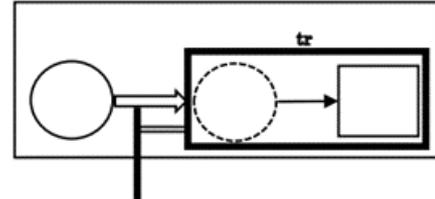


図 11 : 「～し尽くされる」の意味構造図

ところで、玉城(2010)には、『本稿で取り上げるのは「しおわる, しおえる, ... しつくす, ...」の 8 形式で、(中略) 何らかの「おわり」をさしだすという点で共通していると仮定できる』(p.1)という記述が見られる。この記述を勘案すると、「～され尽くす」は、「尽くす」の(擬似)アスペクト解釈時における自動詞用法(の解釈)が優勢となり、図 12 に示すような認識が発動している場合に限り、容認されると想定することができる。というのも、この認識によって、「trajector の付与先が一致していない」という意識の想起が阻止されるからである。

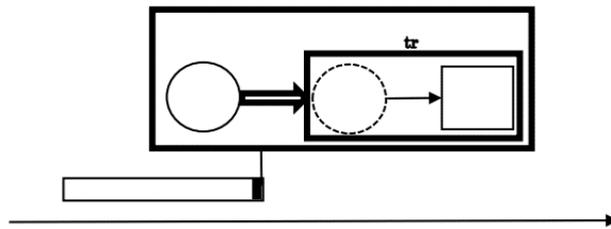


図 12 : 「～され尽くす」の意味構造図

3.2.2. V2=「直す」の場合

杉村(2006b)には、『「一直す」は、(中略) 前に行った行為に不都合があり、もう一度その行為を繰り返して前の結果を修正することを表す場合によく使われる』(p.51)という記述が見られる。この記述を勘案すると、V2=「直す」の場合の意味構造図は、図 13 のように図示することができる。右の長方形内の二重矢印は V1 を示しており、「直す」が、本来、他動詞であることを根拠に、その二重矢印に、棒を接続させることでその棒に V2 の意味を付与させることになるが、右の長方形内の事態を表す二重線の縦棒と左の長方形内の事態を表す二重線の横棒を繋げることで、左の長方形内の事態の構成要素と右の長方形内の事態の構成要素の同一指示関係が成立し、この 2 本の二重線がそのまとまりで「一直す」(=V2)を意味することになる。図 14 は、「～し直される」の意味構造図である。

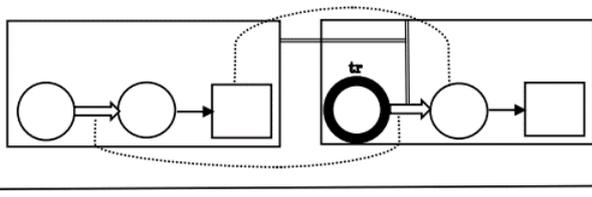


図 13 : 「～し直す」の意味構造図

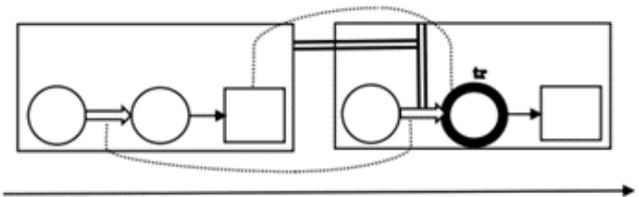


図 14 : 「～し直される」の意味構造図

これまでの考察から、「trajector の付与先が一致していない」という意識の想起が阻止されている(あるいは当該意識が希薄になっている)場合に、V1 の受動化が容認されると想定できる。V2=「直す」の場合、「trajector の付与先が一致していない」という意識の想起が阻止されるのは、図 15 に示すように、『V1 の行為を受けた結果、実体○が(概念化者にとっての理想形である)実体□に【直す】(直った)』という具合に、「直す」が自動詞

的に解釈される場合である。

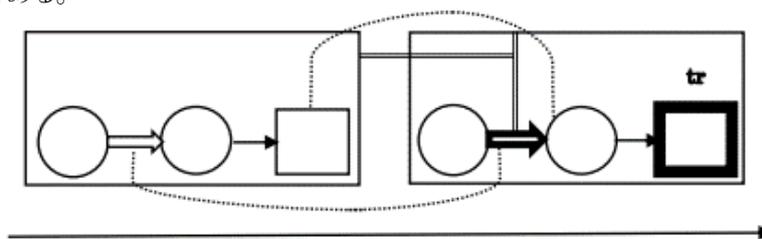


図 15 : 「～され直す」の意味構造図

3.2.3. V2=「返す」の場合

「V1-返す」は多義であるが、杉村(2016)には、その意味のひとつに、『相手から受けた行為に対して、それに応ずる行為をする』(p.140)という記述が見られる。この記述を勘案すると、『この記述が示す「返す」の意味に限定される』という但し書きが必要であるが、V2=「返す」の場合の意味構造図は、図 16 のように図示することができる。右の長方形内の二重矢印は V1 を示しており、「返す」は他動詞であるので、その二重矢印に、棒を接続させることでその棒に V2 の意味を付与させることになるが、右の長方形内の事態を表す二重線の縦棒と左の長方形内の事態を表す二重線の横棒を繋げることで、左の長方形内の事態の構成要素と右の長方形内の事態の構成要素の同一指示関係が成立し、この 2 本の二重線がそのまとまりで「一返す」(=V2) を意味することになる。図 17 は、「～し返される」の意味構造図である。

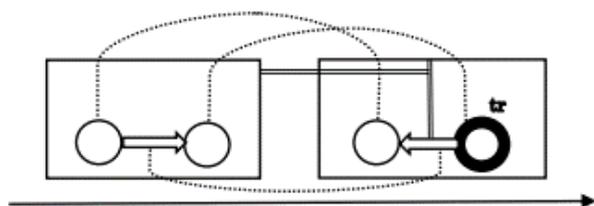


図 16 : 「～し返す」の意味構造図

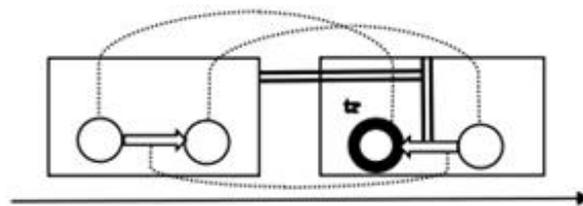


図 17 : 「～し返される」の意味構造図

V2=「返す」の場合は、「尽くす」「直す」と異なり、自動詞用法を想定することは極めて困難である。では、V1 の受動化が容認されている場合、「trajector の付与先が一致していない」という意識の想起はどのように阻止されているのであろうか？ここでは、「V1 受動形+返す」における「返す」は、その意味特性の伝達のみが機能しており、文法特性(他動詞の能動形)は使用時の意識から排除されていると考えたい。この考え方は、相当にラディカルなものであり、広く認められるものではないが、現時点では、このように考える以外、「trajector の付与先が一致していない」という意識の想起を阻止できない。これについては、引き続き、研究を進める必要がある。

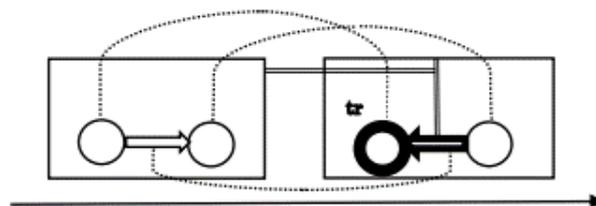


図 18 : 「～され返す」の意味構造図

3.3. 二重受け身 (V1 と V2 の同時受動化) を促進する認知的要因

結論から言うと、二重受け身は《trajector 付与先の不一致》を解消する 1 つの方法と考えられる。ところで、Domain Free でインターネット検索をすると、V2 が「尽くす」「直す」である場合に較べて、「返す」の場合の二重受け身表現の出現頻度が飛び抜けて高い(山部 2013)。それは、3.2.3.で提案した V2 (=「返す」)の《文法特性を意識ない使用》が非常に稀な用法として位置づけられる(それに較べると「尽くす」「直す」の場合の自動詞用法の解釈は、発動の可能性がはるかに高い)ため、V1 が受動形のときに V2 も受動形にすること(二重受け

身)が、上記の不一致を解消させる上で、唯一と言ってもいいほどの非常に有効な手段となるからである。

(16)における「所有され返す」は引用であるため、そのまま記載するしかないが、その表現を受け継ぐ形の「所有占有され返され」(二重受け身表現)は書き手の言葉であり、この表現の使用には、書き手が「所有され返す」という表現に感じている違和感を解消(つまり、「trajector」の付与先が一致していない)という意識の想起の阻止)したいという意識が関わっていると推測することができる。

(16)嫉妬は『所有するものは、その意志を物件の中に反映するちょうどそれと同じだけ、所有物そのものの構造によって規定される、そのかぎりでは所有物に所有され返す』という考えの典型であるといえます。(中略)〈独占欲は程々にしましょう〉というのは、独占つまり所有にこだわりすぎると、かえってその所有という概念に固執しすぎて逆に所有占有され返されてしまいますよ、ということが言いたいのであって、間違っても独占欲を捨てろ、抑えろと言っている訳ではないのでその辺を履き違えないようにして頂きたい。

<http://blog.livedoor.jp/jennifer7/archives/51055172.html? f=jp>

4. おわりに

本稿では、V1 が他動詞である日本語複合動詞(V1+V2)において、V2 が「尽くす」「直す」「返す」の場合、《trajector 付与先の不一致》が V1 受動形を阻止する認知的要因であるが、以下に示す認知プロセスが発動した場合に限り、V1 受動形が容認されることを確認した:「尽くす」・「直す」－【自動詞用法としての解釈の発動】、「返す」－【文法特性に対する意識の希薄化】。また、二重受け身(表現)が《trajector 付与先の不一致》を解消するための手段として用いられていることも確認した。

主要参考文献

- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房。
影山太郎(編)(2013)『複合動詞研究の最先端一謎の解明に向けて』ひつじ書房。
影山太郎(2021)『点と線の言語学 言語類型から見えた日本語の本質』東京:くろしお出版。
久野 暉(1983)『新日本文法研究』大修館書店。
Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
李 良林(2002)「語彙的複合動詞における構成要素の組み合わせ:再帰性に基づく他動性の観点から」『言語科学論集』6, 13-24, 東北大学。
松本 曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, 37-83。
森 貞(2022)「日本語複合動詞の受動態形成について」65-77. *JCLA 22* (日本認知言語学会論文集) CD-ROM 版。
Nishigauchi, Taisuke (1993) “Long distance passive,” In Nobuko Hasegawa (ed.) *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, 79-114, Tokyo: Kurosio Publishers.
西川真理子(1995)『本が読み始められた』と『本が読まれ始めた』について『大阪大学言語文化学』4, 39-48。
大里泰弘(2012)「日英語アспектに関する一考察」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』10-1, 31-38。
柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店。
杉村 泰(2006a)「本動詞『返す』と複合動詞『一返す』の意味の対応について」『ことばの科学』19, 157-165, 名古屋大学言語文化研究会。
杉村 泰(2006b)「コーパスを利用した複合動詞『一直す』の意味分析」『言語文化論集』28(1), 51-66, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科。
杉村 泰(2007)「コーパスを利用した複合動詞『一直る』の意味分析」『言語文化論集』28(2), 87-101, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科。
杉村 泰(2009)「コーパスを利用した複合動詞『一尽くす』の意味分析」『言語文化論集』31(1), 83-95, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科。
杉村 泰(2016)「複合動詞の意味記述に関する一考察」『ことばの科学』30, 127-145, 名古屋大学言語文化研究会。
玉城あゆみ(2010)『終了』を表す複合的な動詞について『留学生教育:琉球大学留学生センター紀要』7, 1-15。
山部順治(2013)「形態素順序に関する、現在進行中の変化:複合動詞の使役形・受身形」『ノートルダム清心女子大学紀要. 外国語・外国文学編/文化学編/日本語・日本文学編』37-1, 111-130。
由本陽子(2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語-モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房。